博士（学術）申請論文『日本古典書誌学論』概要

佐々木　孝浩

本論は、日本古典文学研究の昨今の閉塞感を打ち破る方法として、以前から存在するものながら久しくあまり顧みられることの無かった、書誌学的な研究方法に再注目することを提案し、その具体的な活用法を提示したものである。

書誌学は全ての書物を対象とする学問ではあるが、本論で対象とするのは日本の古典文学作品を保存した江戸時代以前の書物であり、「日本古典書誌学論」の題名はそのことを理由とするものである。日本古典書誌学も一つの大きな分野であり、その対象や方法も多岐に渡るものであるが、本論ではおもに書物の形態に着目して情報を抽出する手法を中心に述べたものである。

本論は序編と五つに分かれる本編からなっている。

序編においては、具体的な検討を行う際に必要となる、書誌学的な基礎知識について概説する。その基礎知識とは書物の製作法である装訂についてであり、第一章「日本古典書誌学論序説」では、日本の古典籍で用いられた基本的な装訂の五種類（巻子装・折本・粘葉装・綴葉装・袋綴）について、各々の形態的特徴を確認した上で、それらの装訂と保存される古典作品との間に存する相関関係について述べ、特によく用いられる巻子装・綴葉装・袋綴の３種には、この順でヒエラルキーが存しており、巻子装が最も格の高い装訂であることを指摘する。またその格差はかつては認識されており、低いものから高いものへの改装が頻繁に行われていたことを確認し、それを見抜いた上で、装訂と内容の関係を判断する必要性を説いている。

第二章「日本語の文字種と書物の関係について」では、日本で用いられてきた漢字・片仮名・平仮名の三種の文字の使い分けが、書物にどのような影響を与えたのかについて検討し、漢字を主体とする巻子装の写本や冊子の版本には罫線が存することが多いのに対して、平仮名を主体とする写本や版本にはこれがないことを確認して、文字種が書物の製作に影響を与えていたこと明らかにする。また漢字・片仮名の冊子本は、写本では罫線がない

ことが多いのに、版本ではこれがあるのは、印刷物であることを意図的に示していると言えるのに対し、平仮名の江戸初前期の版本に写本と同様に罫線がないのは、写本の複製としての存在であることを示すものであり、両者では製作する意識に根本的な相違があることを指摘している。

本編の第一編「巻子装と冊子本」では、装訂の中で最も格が高い巻子装という存在が、冊子体にどの様な影響を与えているかについて、二章に渡って述べている。

第一章「冊子本の外題位置をめぐって」では、表紙に加えられた題名である外題の位置に、表紙左肩のものと中央のものとがあることの意味について、従来の書誌学文献と、古い入木道の伝書類などの関連する記述を整理した上で、南北朝以前書写の原表紙を有する遺例の外題の状況を調査。入木道伝書の作法にあるように、歌書類は左肩に、物語類は中央にあることが多い事実を確認し、僧侶の書写のものではこれが必ずしも当てはまらないことや、私家集については、鎌倉初期頃までは中央にあることが多かったものが、鎌倉中期頃からは左肩にあるものが増える傾向を見出した。前者については、宗派や寺院ごとの作法の存在が関係するらしいこと、後者については、勅撰集の撰集資料とするために部類的な編集が行われ、歌人名に「集」と付けて呼ばれるものではなく、作品としての特別な書名を有するものが増えていく中で、私家集の社会的地位が高まったことと関係するらしいことを考察した。また外題の位置の違いの意味と由来を検討し、左肩は巻子装の表紙の外題の位置と共通することから、冊子の左肩の外題は、その作品が巻子装に書かれうる存在であることを示し、中央のものは巻子装では保存されないものであることを示していると考えられるとの説を提示した。

第二章「絵巻物と絵草子―挿絵と装訂の関係について―」では、格の高い装訂であった巻子装には、作り物語の本文のみでは保存されないのに、挿絵が入っていれば絵巻として製作されるという事実と、それ故に日本では絵入り冊子本の登場が十六世紀まで遅れるという事実にについて、その具体的な実態を確認。絵巻から絵草子が生み出される構造面での問題と、絵巻も絵草子と呼ばれるような混乱状況などを検討して、巻子装という存在が日本の絵入り本の歴史に大きな影響を与えていることを確認した。

第二編「巻子装と歌書・連歌書」では、巻子装の格の高さを証明する存在であると言える、勅撰集の奏覧本について総合的に検討するとともに、巻子装の書物が保存する本文が優良であることを、二つの『新撰菟玖波集』の伝本を対象として具体的に考察している。

第一章「勅撰和歌集と巻子装」では、勅撰集の奏覧本は巻子装で仕立てらるのが故実であったことを古記録類

を中心として検討し、またその造本の実態や清書の担当者についても確認。その上で、巻子装で仕立てられた勅撰和歌集の現存する伝本や古筆切を博捜してその情報を整理し、それらの資料価値の高さを確認している。

第二章「勅撰和歌集の面影―『新撰菟玖波集』の巻子装本をめぐって―」では、準勅撰『新撰菟玖波集』の現存唯一の巻子装伝本である、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵の巻第一のみの一軸を対象として、その素性を明らかにすべく、編纂に関与した三条西実隆の日記『実隆公記』から伺える同集の撰集過程と対照させつつ検討を加えた。その結果、同本の筆者が、古筆家の鑑定にある連歌師宗牧ではなく、奏覧本の清書を担当した姉小路基綱であること、またその本文も資料的価値が高いものであること、奏覧本そのものではなく、その一歩手前の中書本と考えるのが穏当であろうことを確認した。併せて翻刻を付している。

第三章「巻子装であること―早稲田大学図書館蔵『新撰菟玖波集〔政弘句抄出〕』をめぐって」では、やはり当初からの巻子装ではあるものの、『新撰菟玖波集』そのものではなく、大内政弘の入集句を付句と共に抜書きした特殊な伝本である、早稲田大学附属図書館蔵の一軸を対象とし、その製作の背景について考察を行っている。本文の検討を通して、『新撰菟玖波集』の現存本に存する句が一句見えない代わりに、同巻中に現存本で確認できない一句が存していることを発見し、その意義と原因について検討。同集の実質的な発起人でありパトロンでもあった政弘の死期が近いことを知った撰集協力者の牡丹花肖柏が、入集状況を彼に伝えるべく、奏覧直前に急遽製作した抄出本であろうとの説を提示。併せてこの異本句の存在は、同集の従来の系統分類に再検討を促す問題であることをも指摘した。こちらも翻刻を付している。

第三編「源氏物語と書誌学」では、『源氏物語』の最善本として長らく用いられてきた「大島本」の従来の書誌学的認識に誤りがあることを指摘し、正しい認識のもとに研究の再検討が行われるべきであることを指摘している。

第一章「「大島本源氏物語」の書誌学的研究」では、「大島本」の従来の書誌学的認識を整理した上で、その疑問に感じられる問題点を指摘し、それらについて具体的に検討。筆跡や奥書、書入れや付箋、綴穴や蔵書印などの状況から、「大島本」は一筆本の残欠十九冊を寄合書で補写して再び揃本にしたものであることを指摘した。さらにその書写者も首尾二冊を除いて地方武士であろうことを推測し、そうした「大島本」の実態を再認識して本文を再検討する必要があることを訴えている。

第二章「二つの「定家本源氏物語」の再検討―「大島本」という窓から二種の奥入に及ぶ―」では、「大島本」

を正しく認識することが、従来の研究にどのように拘わってくるのかを確認すべく、藤原定家の『源氏物語』注釈である『奥入』の二種、即ち「大島本」とその同系統の残欠本に存する「奥入」と、定家手沢本の帖末部分を切り出して作成された「自筆奥入」との先後関係が、未だに確定されていない問題を検討。「自筆奥入」に残存する物語本文の特徴と同本の書誌的な性格を、「大島本」とその同系統のものとの比較を通して確認して、「自筆奥入」が先立つことを物理的に確定させ、同本が定家の日記『明月記』に見える『源氏物語』書写記事に該当するものである可能性が高いことなどを指摘している。

第三章「「大島本源氏物語」続考――「関屋」冊奥書をめぐって――」では、従来「大島本」認識の最大の根拠とされてきた「関屋」冊の飛鳥井雅康奥書が書写奥書ではなく本奥書であるという、第一章で指摘した事実を別方向からのより強力に確定すべく、その奥書の年代に近い時代に書写された姉小路基綱他の寄合書になる大正大学蔵本を比較対象として具体的に考察。大正大本の十三帖に存する書写奥書とは記述の形式に共通性があること、同大本と「大島本」の「関屋」本文が極めて近い関係にあることなどから、「大島本」「関屋」冊は、欠落部分を室町時代の流布本で補写したものであり、当然その奥書を「大島本」全体に及ぼして考えることは絶対にしてはならないことであることを再確認している。

第四編「平家物語と書誌学」では、『源氏物語』とは、物語の性質はもとより書物の形態的にも大きく異なる『平家物語』を取り上げ、その伝本の書誌学的特徴について考察を行っている。

第一章「書物としての平家物語」では、室町時代以前書写の伝本の書誌情報を整理し、装訂や大きさ、外題と内題の有り様、表記法、書写された地域などを調査。大ぶりな袋綴で、内題の表記が不統一であることが多いなどの、『平家物語』という作品の古写伝本が有する特徴を総合的に把握して、作品の性質が様々な点で造本に現れる実態を確認している。

第二章「巻子装の平家物語――「長門切」についての書誌学的考察――」では、現存唯一の『平家物語』の古写巻子本の断簡である「長門切」を対象として考察。その書誌学的な特徴を多方面から検討し、世尊寺流に属する三名の能筆による寄合書であろうこと、絵巻の詞書説は成り立たないものと考えられることなどを指摘。「長門切」本の特殊性をより明らかにしている。

第三章「「屋代本平家物語」の書誌学的再検討」では、やはり非常に特異な形態を有する『平家物語』の一伝本である國學院大学蔵の「屋代本」について、書誌学的な事項を中心に考察。大きさや装訂が極めて珍しく、紙

質や筆跡も高級であることからも、成立の場が高貴であろうことを推測し、国語学的な特徴と書風などから、室町中後期頃の書写の可能性が高いことを指摘している。

第五編「古典文学と書誌学」では、『枕草紙』や歴史物語の伝本の書誌学的な特徴などを検討すると共に、古典文学作品の受容者にして、その伝本の生産者でもあった地方武士の文芸と書写の活動についての考察を行った。

第一章「定家本としての「枕草子」」では、『枕草子』の有力伝本である「三巻本」に共通して存する安貞二年三月付の奥書の、記主「耄及愚翁」を藤原定家とする説が提示されてから半世紀以上経つのに、これが確定されることなく現在に至っている問題を検討。奥書の表記の特徴や、本文勘物の特徴などから、奥書の記主を定家と確定させ、その上で定家本が中世期においてはあまり広まっていなかったことを受容史から確認し、今後の検討が必要となる問題を提示して、奥書を書誌学的に読み込むことの大切さを訴えている。

第二章「書物としての『枕草子抜書』」では、第一章でも言及している三巻本からの抜書本を対象として検討。現存五伝本の書誌情報を整理し、それらが相互にはあまり近い関係にないことから、室町時代には相応に広まっていたことを推測すると共に、五本何れもが連歌と関係を有することを確認して、従来の明確にされていなかった抄出の理由を、連歌の付合の参考書とするためであったことと確定させ、今後の抜書本を含めた『枕草紙』諸伝本の研究の方向性を提案している。

第三章「書物としての歴史物語」では、第四編第一章において『平家物語』に用いたのと同様の方法で、『栄花物語』と『大鏡』『今鏡』『水鏡』『増鏡』の所謂四鏡とを対象として、その古写本や古筆切の書誌的な特徴を整理検討。歴史物語は巻子装で製作されうる存在であったこと、『栄花物語』と『大鏡』は保存される冊子の形状に異なる傾向があり、それが作品の性格の違いを示している可能性などを指摘し、書物の形態と保存される作品の相関関係を検討する方法の有効性を訴えている。

第四章「室町期東国武士が書写した八代集―韓国国立中央図書館蔵・雲岑筆『古今和歌集』をめぐって―」では、韓国国立中央図書館に所蔵される定家貞応二年本『古今集』の綴葉装一帖に、弘治三年九月付「雲岑軒早雪」の書写奥書が存することを起点として、同書の性格について検討。同図書館に同一人物と思われる「釈雲岑」の天文十六年奥書を有する『拾遺集』の袋綴本も存することから、八代集として書写された可能性を求めて、雲岑奥書を有する『後撰集』・『後拾遺集』・『金葉集』・『千載集』の存在を見出し、所在不明の『千載集』を除く諸集の書誌情報を調査。奥書の人物が関東の有力な武士であった上杉憲賢であることを突き止め、その八代集の集

書活動の実態や歴史的位置を明らかにして、この様な地方武士の手になる写本の存在意義などについて述べている。

第五章「長門二宮忌宮大宮司竹中家の文芸―未詳家集断簡から見えてくるもの―」では、室町後期の永正十八年に山口から九州に旅した人物の紀行文的な断簡を起点として、長門国府周辺の分文芸活動を二宮忌宮神社の大宮司家竹中家歴代を中心に検討。「大島本源氏物語」が同家と関連する可能性を探り、「大島本」と「長門本平家物語」の補写部分のある巻の書風の共通性が高いことなどを指摘して、地方の文芸研究の可能性と方向性についての提言を行っている。

以上の如く本論は、特定の文学ジャンルや作品を対象とせず、敢えてジャンルを分散させることによって、書物の形態とそこに保存される内容に相関関係があったことを明らかにすることを目的として、考察を積み重ねたものである。時代的にほぼ中世期を対象としているのは、文学作品の平安時代写本が極端に少なく、傾向の抽出を行うことが難しいこと、江戸時代には商業出版の成立により、従来の造本の故実があまり顧みられなくなっており、これを加えると明確な傾向を明らかにすることが不可能となると考えられることによるものである。

皮相的な考察に終始していることは否めないが、内容を深く検討するためには、その本文の器たる書物の書誌的な情報を抽出し、それを活かしてその本文の性格や価値を確定した上で、研究に用いるように心掛けることによって、誤りの少ないより本格的で深い研究が可能となるはずであることを明らかにできたものと確信する。とはいえ、それぞれのジャンルや作品の検討対象も少なく、また全てのジャンルを考察しているわけでもない。今後より総合的かつ具体的に考察を重ねていく必要があることは言うまでもないが、基礎的にして即物的でもあるこの研究方法の有効性は、考察を重ねても揺らぐことはないはずである。